

編集委員会便り

今回の特集“廃棄物のリサイクル”は、昭和63年11月号の特集“非金属廃棄物の再資源化”があるにもかかわらず、ゴミ問題が重要な社会問題であること、多様な廃棄物があることなどを考慮して、編集された。当初、林委員長より、生活汚泥と生ゴミの微生物による有機肥料化が提起され、これが軸となって、この特集となった。小生が農学部在籍している関係もあってお手伝することとなったが、専門も異なるため、東京大学工学部の上野 勲先生と京都大学環境保全センターの高月 紘教授のお世話によって、やっと企画が出来上がったものであり、ただただ、ご指導いただいた先生方、お忙しい中ご執筆いただいた先生方に感謝し御礼申し上げる次第である。

かつて編集された特集と同じような課題を取り上げてよいかどうか、編集委員会で話題になった。特集は大切なテーマについて、それぞれ協議して編集している。よって特集が出てからも、当然、技術や研究の発展も著しいものが多い。そのため、かつての特集の課題を見直すことも必要ではなからうかとの見解も大筋において了承されたように思う。今後はこのような特集の編集も出てくると思われるが、ご意見があれば、どしどし学会事務局までお寄せいただきたい。

当初、研究会であったこの学会も、ご存じのように、10年を機に学会に発展し、また会誌の表紙も一新された。6月の編集委員会では、委員長より、これまで特集にかなりの力を注いできたが、学会になったことでもあり、研究論文を増加させるようにして行きたいとの方針がだされた。しかし多くの異なった分野の方々を構成されている学会だけに、限られた専門の方で構成されている学会誌の、研究論文のスタイルが良いかどうか。検討を要するところである。委員長の見解は、多少専門が異なった方々にも、理解し易いように心配りして執筆していただけないかとのことである。

投稿された研究論文や技術報告は、編集委員会に先立って行われる査読委員会にかけられる。ここで査読者の決定や、査読された原稿の取り扱いが検討される。掲載に適すると判定されたもののみが、編集委員会に提出される。査読委員の方々は、各分野に互っているため、専門によっては採択され難いということはないように注意されている。

学会に発展したことであり、遠慮や躊躇されることなく、どしどし投稿してほしい。

研究論文などの比率が大きくなった場合、当然他の頁、特に特集を減らさざるを得ないと思われる。いかにするかが、委員長から各編集委員に問われている事項である。

最後に私事で恐縮だが、この特集を企画しながら頭に浮かぶのが、研究室の大掃除のときの、年令による、ものの捨て方の大担さと、部屋の使い方の相違である。生まれ育った年代ではなく、個人差かもしれないが、最後であるが昭和一桁生まれの小生は、物の無い時代に育ち、修士論文のための実験をするにも、古い計測器をなだめすかしながら使い、卒業後、国の試験研究機関に勤めたが、同様に乏しかった。いまでも、捨てるのに、ひょっとして使う人が出て来るのではなからうか、と躊躇してしまう。反作用として限られたスペースの使い方が悪くなり、笑われてしまう。しかし、ある年代の人達は、思い切りが良い。これも若くなるにつれて、思い切りが良くなるのではなく、最近の若い院生は多少躊躇するようである。使い捨ても美德でなくなり、限られた資源を有効に使用し、より安全な、より快適な生活の場を次世代にむけて残していかなければならないが、人間の弱さか、ついつい、目前の快適さに走ってしまう。反省の日々。

並河 清
(京都大学農学部教授)